

## 『千載佳句』白詩本文について

金澤 典子

### 一、はじめに

『千載佳句』には白居易の詩句（以下、白詩）が多く採られている。稿者は、その本文と、旧鈔本および刊本との校異を『千載佳句』白詩校異<sup>①</sup>（本誌8号、および、『文化継承学論集』第12号）としては発表したが、ここからは、『千載佳句』と刊本とが異なる本文をもつとき、『千載佳句』本文は旧鈔本と同文に作る傾向が見て取れる。これまでの旧鈔本研究から、唐鈔本・旧鈔本には異なる本文に作る箇所が多見し、それは宋代の印刷技術が発展する過程において、本文改変が行われたためであると考えられている<sup>②</sup>。唐詩の唐鈔本と旧鈔本は詩人もしくはその時代の本文を留めるという意味で重要であるが、『千載佳句』白詩本文はその旧鈔本の本文を写し取っていると看做せるようであり、そうであれば、『千載佳句』所載の詩句は、その唐鈔本・旧鈔本の散佚した多くの詩人の、原態に近い本文を留めたものという期待がもたれることになる<sup>③</sup>。

しかしながら、『千載佳句』白詩校異<sup>④</sup>の詳細をみれば、『千載佳句』白詩本文が旧鈔本と一致しない場合も少なくない。特に、金澤文庫本および『和漢朗詠集』とは、本文を異にする場合が多いように思われる。本稿では上述の拙稿『千載佳句』白詩校異<sup>⑤</sup>を分析して、どのような異同が見られるのかを考察し、『千載佳句』白詩が旧鈔本系本文であること  
を明らかにしたい。

『千載佳句』本文については、妹尾昌典氏が数首の校勘を行って「唐代の古態を残している箇所（長所）とそうでない箇所（短所）が混在している」<sup>⑥</sup>と評し、「今後さらなる校勘、およびそれに伴う研究が為されるべき作品」と述べている。実のところ、『白氏文集』神田本や『管見抄』などの唐詩旧鈔本においても、「唐代の古態を残している箇所（長所）とそうでない箇所（短所）」がある。氏のいう短所は、これまでの旧鈔本研究の視座に立てば、主として誤写により本文に持ち込まれたものである。

日本で書写された旧鈔本は、中国書物に対する尊重の意識から本文を忠実に写し録ろうという姿勢で製作されたものだが<sup>註54</sup>、それでも、その本文に誤写が混入するのを避けることができなかった。『千載佳句』が底本とした唐鈔本・旧鈔本にすでに誤写が含まれていたであろうし、『千載佳句』が書写されていく過程においてもまた、誤写による本文が混入したと考えられる。『千載佳句』本文の研究のためには、誤写についての理解を深めることを避けることができない。

『千載佳句』の個々の詩句の校勘作業を行うに際しては、その全体的な見通しも重要になると考える。誤写の混入はどのような箇所が生じやすく、「唐代の古態」から現代の通行本本文の「今態」に改変されるにはどのような考え方や操作を経たのかを探ることは、個々の詩句の校勘に役立つはずである。

白詩は唐鈔本や旧鈔本の残存する稀有な例の一であり、それぞれの時代の刊本が残されているという意味でも貴重である。『御定全唐詩』の校訂を概観すると、詩本文の改訂には時代ごとの潮流があると考えられる<sup>註55</sup>が、それを例証することのできるほば唯一の例が白詩である。『千載佳句』には一五〇人以上の詩人の作が採られているが、白詩本文についての理解は、『千載佳句』所載の他の詩人の作にも敷衍できるところであろうし、『千載佳句』本文が旧鈔本系本文をもつのであれば、唐詩の旧鈔本本文から「唐代の古態」を適切に抽出することにも貢献するだろう。

本稿では、まず、『千載佳句』白詩本文と旧鈔本のそれがどの程度に同文であるのかをみることにし、『千載佳句』白詩本文が旧鈔本系本文で

あることを確認し(第二章)、平安朝朗詠集に収録された白詩本文の性質を考える(第三章)。平安朝朗詠集の本文が旧鈔本系本文であれば、唐詩の原態を知る資料が増すことになるし、『千載佳句』所載詩の誤写を考える上でも役立つと考えられる<sup>註56</sup>。

## 凡例

一 『千載佳句』の本文は、歴史民俗博物館蔵の影印(貴重典籍叢書 国立歴史民俗博物館蔵 文学篇 第21巻 『漢詩文』(臨川書店、二〇〇一年) 収録)を底本とした。歴史民俗博物館蔵本には欠帖があり、それらの詩句は九州大学所蔵本で補った(作品番号 39 ～ 51。本文の後に「九」を付した)。

一 以下の諸本を校異の対象とした。

『千載佳句』：歴博本(上述の底本)、九大本(『松平文庫影印叢書 第18巻』(漢詩文集編)(新典社、一九九七年)、甲本(国立公文書館蔵、和学謙談所旧蔵)、乙本(国立公文書館蔵、林家旧蔵、国図本(国会図書館蔵)。現在知られている『千載佳句』の諸本はこの五本のみであり、歴博本が鎌倉写本、九大本と甲本が江戸前期、乙本と国図本は江戸中期写本とされている<sup>註57</sup>。各々、「歴

一九一甲」「乙」「国」と略記する。

『和漢朗詠集』：『粘葉本和漢朗詠集』(二)玄社、一九九三年)と京都国立博物館蔵『 hands 絵和漢朗詠抄』(○国宝 (<http://www.emuseum.jp/>) にて画像公開)を用いる。芦手本は、雲紙本系列に分類されており、粘葉本との相違が指摘されている。山本まり子氏の一連の研究<sup>註58</sup>により、芦手本は、雲紙本系列に属するも粘葉本の影響が見られることが確認されている。両者に共通する異同は「和」で示し、差異が有る場合には、各々「和<sup>註59</sup>」「和」と記す。

『新撰朗詠集』：ハーバード大学フォックス美術館蔵『新撰朗詠集』の影印である『鎌

倉新撰朗詠集』(二)玄社、一九八四年)と東京国立博物館蔵『新撰朗詠集』(松田武夫解説『新撰朗詠集』梅沢本複製)『古今典文庫、一九六三年』)を用いた。両者に共通する異同は「新」で示し、差異が有る場合には、それぞれ「新」と「新體」と記す。

『白氏文集』旧鈔本：神田本『神田本白氏文集の研究』(勉誠社、一九八二年)、金澤文庫本『白氏文集 金澤文庫本』(大東急記念文庫、一九八三年)、『管見抄』(国立公文書館蔵)、『白氏長慶集卷第廿』(九州国立博物館蔵『唐詩殘篇』(紙背 白氏長慶集卷第廿))として、国宝 (<http://www.metmuseum.jp/>) にて画像公開。虫損等で本文が解読できない箇所は『佚名唐詩集殘卷 白氏長慶集卷第廿』(貴重古典籍刊行会、一九五八年)で補った、敦煌本(フランス国立図書館蔵。 <http://gallica.bnf.fr/>)で公開、『白氏詩卷』(藤原行成集)(二)玄社、一九九五年)。各々、「神」「金」「管」「長」「敦」「卷」と略記する。白氏文集要文抄については、太田次男氏の調査報告に本文が掲載されているもののみを記す(『東大寺宗性『白氏文集要文抄』』『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究』(勉誠社、一九九七年)。

『白氏文集』刊本：宋刊本『白氏長慶集』(文字古籍刊行社、一九五五年)、馬元調本(錢謙益、季振宜遞輯、屈萬里、劉兆祐主編『全唐詩稿本』(聯經出版事業公司、一九七九年)、那波本(下定雅弘・神鷹徳治編『那波本白氏文集 宮内庁所蔵』(勉誠出版、二〇二二年)、汪本『白香山詩集』(臺灣中華書局、一九六九年)。各々、「宋」「馬」「那」「汪」と略記する。

『文苑英華』：未版(李之涪整理『文苑英華』(中央研究院歷史語言研究所、二〇〇八年)、内閣文庫の明鈔本(国立公文書館蔵)、明刊本『文苑英華』(中華書局、一九六六年)で異同を示した。明鈔本は「英影」と略記し、明刊本は「英刊」と記し、両者をさす場合は「英」と記す。第七一〜一八〇巻は宋本残巻が残る。傳增湘『文苑英華校記』(北京圖書館出版社、二〇〇六年)で該

当箇所を確認した。

『萬首唐人絶句』：『萬首唐人絶句』(文字古籍刊行社出版、一九五五年)を用いた。「萬」と略記する。

『樂府詩集』：中津濱涉『樂府詩集の研究』(汲古書院、一九七〇年)を用いた。「楽」と略記する。

『才調集』：『才調集』(台湾商務印書館四部叢刊、一九六五年)。「才」と略記する。

『唐宮統鑑』：故宮博物院編『故宮珍本叢刊 唐宮統鑑』(海南出版社、二〇〇〇年)を用いた。「唐」と略記する。

一、本文は旧漢字通行字体を用い、異体字の区別は原則として行わない。但し、古字書等で二つ以上の漢字の別字とされている場合は、その例に従わない。踊り字はその前の漢字と同一として扱う。異体字の判定には、字様や金石文および『類聚名義抄』を用いた。なお、これまでの研究では、「万」と「萬」は時代性を表現するものと認識されているので、本稿においても両者を区別する。

二、『千載佳句』本文すべてを例示する場合、拙稿『千載佳句』白詩校異(本誌第8号)と同じく、以下の書式に従う。

金字書 本文(七字で区切る) 作者注/詩題註 花房曹号

その本文をもつ張本リスト 那波本詩題

千載佳句本文 ↓ 異同本文 『異同諸本リスト』 ※異同がないときには省略

一、本文中の割注に関して、「二作」など本文にかかわる割注は小括弧でくくる。

## 二、『千載佳句』と旧鈔本の本文

先行研究<sup>註9)</sup>では、『千載佳句』諸本の訓点や書入等を精査して、鎌倉写本一本と江戸写本四本の『千載佳句』諸本を二系統に分けるにも関わらず、その白詩詩句の本文に関しては、上述の拙稿『千載佳句』白詩校異<sup>註10)</sup>でみたように、異同は極めて少なく、誤写の範囲と異ってよい。このことから、旧鈔本書写の場合と同じく、『千載佳句』が書写されていく過程で、その底本が尊重され、そのままに写し取ろうという意識があったと看做してよいと思われる<sup>註10)</sup>。『千載佳句』は中国伝来の書物ではないけれども、中国伝来の詩句から構成されており、そのため、江戸写本に至るまで、忠実な書写が行われてきたのであろう。そうであれば、『千載佳句』は、大江維時（仁和四（888）年〜応和三（963）年）により撰録された旧鈔本本文を留めていると断定してよいにちがいない。しかし、『千載佳句』の最も古い写本は鎌倉時代のものであり、忠実な書写の姿勢を裏証できるのは鎌倉写本から江戸写本のそれであつて、鎌倉写本成立までについては不詳とせざるを得ない。さらに、上述のように、『千載佳句』白詩本文は必ずしも旧鈔本と一致しない場合も多見する。本章では、『千載佳句』白詩本文の内容を検証して、『千載佳句』の本文が旧鈔本系のものであることを明らかにしたい（以下では原則的に鎌倉写本を『千載佳句』と呼ぶ）。

『千載佳句』の本文が宋刊本と異に作り、旧鈔本の本文と同文である詩

句は、

管見抄……

四〇例

金澤文庫本……

三六例

白氏長慶集卷廿二……

一二例

白氏詩卷……

四例

に及ぶ。

一方で、『千載佳句』本文が旧鈔本諸本のそれとは異なる場合もある。上述したように、旧鈔本には誤写が避けられず、そのために旧鈔本系本文に異同が生じるのであるが、以下の例からは、誤写というのでは説明できない異同もあるように思われる。

金子尊<sup>註11)</sup>『千載佳句』異同本文「異同諸本リス」で示す。異体字であつても複数の意味を持つ字を含む。

管見抄：71 印<sup>マ</sup>印<sup>マ</sup>乙<sup>マ</sup>国<sup>マ</sup>・弔<sup>マ</sup>〔管金・宋馬那注・唐〕※金有り、112 華<sup>マ</sup>花<sup>マ</sup>〔和・管・

宋馬那注・唐〕※和有り、130 枯<sup>マ</sup>枯<sup>マ</sup>〔和〕古<sup>マ</sup>管<sup>マ</sup>・宋馬那注・唐〕※和有り、216

旋<sup>マ</sup>於<sup>マ</sup>〔新・管・宋馬那注・唐〕※新有り、221 消<sup>マ</sup>銷<sup>マ</sup>〔管金・宋馬那注・唐〕※金

有り、290 界<sup>マ</sup>下<sup>マ</sup>里<sup>マ</sup>〔和<sup>マ</sup>・管<sup>マ</sup>・宋馬那注・唐〕※和有り、319 幢<sup>マ</sup>幢<sup>マ</sup>〔管

※金有り、453 閣<sup>マ</sup>閣<sup>マ</sup>〔新・管・馬注・唐〕※新有り、474 性<sup>マ</sup>性<sup>マ</sup>々<sup>マ</sup>〔管〕※衍字、

479 衾<sup>マ</sup>裘<sup>マ</sup>〔管金・宋馬那注・唐〕※金有り、505 倚<sup>マ</sup>傍<sup>マ</sup>〔新・宋馬那注・唐〕※

〔管〕※新有り、510 鈎<sup>マ</sup>釣<sup>マ</sup>〔管金・宋馬那注・唐〕※金有り、547 夜<sup>マ</sup>下<sup>マ</sup>ナシ<sup>マ</sup>〔管

※和有り、592 万<sup>マ</sup>萬<sup>マ</sup>〔管〕※宋馬那注・萬唐、657 髮<sup>マ</sup>鬢<sup>マ</sup>〔和・管・宋馬那注・唐

※和有り、657 三分白<sup>マ</sup>三分管<sup>マ</sup>〕※右に「巨」、704 雨<sup>マ</sup>雨<sup>マ</sup>〔管〕※金有り、720 耐

↓ 酣管・宋馬那注・唐 ※要有り、747 臉管・宋馬那注・唐、747 睇  
管、765 綠・淥管・宋馬那注・唐、789 上面↓面上管、795 屈屈↓ナシ管、  
795 未↓來管、816 令↓合管・宋馬那注・唐、816 素・素管・宋馬那注・唐、  
822 開↓聞管、946 峽↓浹管 ※和有り、980 得出↓出得管・宋馬那注・唐、  
991 爐・爐甲・和管・宋那 ※和長有り、994 向↓歸管・宋馬那注・唐、1054  
乘乘〔九乙国・管・宋馬那注・唐、1054 苦行↓行苦管・宋馬那注・唐

(三三例)

金澤文庫本：71 印〔乙国・弔管金・宋馬那注・唐 ※要有り、93 浙↓折〔金  
卷・宋馬那注・萬唐 ※要有り、113 那↓爭新・金・宋馬那注・唐 ※新有り、168  
箏・筋〔金・宋馬那注・萬唐 ※新有り、198 深・染〔九甲乙国・添〔金・宋馬那注・  
唐、215 纈・夾〔金・宋馬那注・英唐 ※和有り、221 消・銷管金・宋馬那注・  
唐 ※管有り、319 万↓萬〔金・宋馬那注・唐 ※管有り、321 曜・耀〔金・耀宋  
馬那注・唐、402 謝↓酬〔金・宋馬那注・唐、464 万↓萬〔乙国・金・宋馬那注・  
唐、471 宜↓隨〔金・那、471 只↓祇〔金・那、479 衾・裘管金・宋馬那注・  
唐 ※管有り、488 半↓走〔金、497 湏↓須〔金・宋馬那注・唐、508 點・點〔金・  
宋馬那注・英唐 ※管有り、510 鈎↓鈎管金・宋馬那注・唐 ※管有り、511 人・生  
↓主人〔金・那 ※神・管長有り、532 終↓應〔金 ※新有り、582 中↓上〔金 ※要  
有り、587 江↓頭〔金・宋馬那注・唐、644 ト↓占〔金・宋馬那注・唐、691 潦↓  
老〔金、691 且↓亦〔金・宋馬那注・唐、693 眼↓眠〔金、711 案↓接〔卷〕・按  
〔金・宋馬那注・唐 ※卷有り、715 點・點〔金、734 苜・苜管〔金・宋馬那・

高墮〔注〕・倭墮〔唐 ※管有り、746 花↓花〔金卷〕・飛采馬那注・唐 ※卷有  
り、873 連・夢澤↓連・露澤〔金 ※衍字、932 薄・駿〔金・宋馬那注・唐、932 汗  
↓輪〔金・宋馬那注・唐・寒〔英〕、958 罇・樽〔金・宋馬那注・唐・罇〔英〕、  
961 万・萬〔金・宋馬那注・唐 ※管有り、1008 移↓口〔金 ※管有り、1025 有↓ナ  
シ〔金 ※和有り、1047 誰↓何〔金・宋馬那注・英萬唐 (三八例)

白氏長慶集卷廿二：115 帳↓口〔長〕※虫損、244 幾・齒〔長〕※要有り、244 如↓口〔長〕

※虫損、244 夜深↓口口〔長〕※虫損、244 獨・猶・長・宋馬那注・萬唐 ※要有り、

244 立・登〔長〕※要有り、251 三五↓口口〔長〕※虫損、411 佩↓珮〔采馬那注・

唐・口〔長〕※虫損、411 漁・魚〔長〕※和有り、415 秋↓口〔長〕※虫損、415 同

年・前年〔長・宋馬那注・萬唐、502 法↓法〔長・宋馬那注・萬唐、531 菴・蔞↓

口口〔長〕※虫損、614 焚↓香・長、672 爭・忿↓口口〔長〕※虫損、672 不同↓向

不〔長〕※管有り、836 勺・勺↓勿・勿〔甲乙国〕・句〔長〕・勺〔采馬那注・唐

(二七例)

白氏詩卷：93 浙↓折〔金卷・宋馬那注・萬唐 ※金有り、309 蘆・籠〔卷・那注〕※

金有り、異体字、711 案↓接〔卷〕・按〔金・宋馬那注・唐 ※管有り、746 花↓花

〔金卷〕・飛采馬那注・唐 (四例)

『千載佳句』と『管見抄』の異同は三三例に及ぶ。そのうち、『管見抄』  
が孤例である場合、および、二本以上の旧鈔本本文が一致しているのに  
『千載佳句』の本文が相違する場合は、誤写の可能性がある。前者は『管

『見抄』の誤写、後者は『千載佳句』の誤写である。誤写であると決めるためにはその本文の中身を精査しなければならないが、この誤写の可能性のあるものをひとまず除外すると、本文に異なるのは一〇詩句一例（130、505、592、747、765、816（二例）、980、991、994、1054）となる。

その異なる詳細をみると、「字の転倒」が二例（980、1054）あり、このようなことは返り点による訓読を行う箇所起こりやすいと考えられている（註11）（この二例は、詩句の内容から『千載佳句』の誤写）。

また、字体の類似性から生じた誤写であろうと考えられる異同がある。

「合」と「合」（816）は草書体が極めて類似しており（「合」の草書体は「合」のように見えるものがある）、「素」と「密」（816）、「向」と「歸」（994）も同様である。たとえば九州国立博物館蔵『白氏長慶集卷廿二』は草行書体で記されており、『千載佳句』撰録の際の底本もそのような書体で書かれていたと思われるし、また、『千載佳句』撰者がそれを草行書体で記したという想定を否定する要素も考え付かない。この三例は、詩句の内容から『千載佳句』の誤写だと考えられる。東宮学士をつとめた選者の大江維時は唐詩に関して十分な知識をもち、草書体にも不自由はなかったであろうが、時代の下った『千載佳句』書写者が草書体を見誤ることはあり得たことだろう。

のこる六例のうちの五例は、「古」と「枯」（130）（註12）、「傍」と「旁」（505）、『千載佳句』は「倚」に作るなど形声文字意符の有無による異同や、形成文字の意符が相違する（747 睪→臉、765 緑→渌、991 爐→鑪、あとから見

るように、『千載佳句』と諸本の異同にはこのような意符の相違に基づくものが少なくない。「緑」と「渌」（765）の異同は、『千載佳句』の書写者がその草書体から「渌」（こす）を思いつかず、見慣れた「緑」と認識した誤写であるかもしれない（註13）。一方、「爐」と「鑪」（991）は、『白氏長慶集卷第廿二』は『千載佳句』と同じに作っており、かつ刊本においても揺れており、異体字として認識されていたことがわかる。

『管見抄』と『千載佳句』にも含まれる詩句の中で、旧鈔本系本文であるかの問題が生じるのは「万」↓「萬」（592、「萬金」）である。唐詩の旧鈔本系本文では「万」に作るものが多く、『千載佳句』白詩では江戸中期写本で「萬物」と作る例（217）があるものの、鎌倉写本には見られない。鎌倉時代には宋刊本が流入しており、現存する『管見抄』（現存するのは一本のみ）は永仁三（1295）年に書写されたものなので、その書写の際に、底本に記されていた「万」が「萬」と誤って書写されたとも考えられる（註14）。そうであれば、『管見抄』と『千載佳句』の本文の異同は、意符の相違に基づく異同に検討の余地はあるけれども、鈔本では避けられない誤写の範囲である。このことは、『千載佳句』本文が旧鈔本系本文を留めていることを示す一例となるだろう。

『白氏長慶集卷廿二』と『千載佳句』の相違は多く虫損のためであり、その他の異同は、『管見抄』の場合と同じく、鈔本では避けられない誤写の範囲である。『白氏長慶集卷廿二』孤例が五例（244（二例）、411、672、836）、『千載佳句』孤例が二例（244、415）あり、それらの孤例は、詩の内容が

ら誤写であると考えられる。『千載佳句』<sup>836</sup> 番首では、『白氏長慶集卷廿二』が該当箇所を誤写するが、『千載佳句』が異文としてその『白氏長慶集卷廿二』本文を書き留めていることが興味深い。

『白氏詩卷』においては、『千載佳句』の孤例が一例(93)、『白氏詩卷』の誤写が一例(71)有り、一例(74)は異文の表記の有無、その他の一例(309)は異体字である。『千載佳句』の孤例は諸本が「沂」に作る所を「浙」とし、ここは川名で、「沂」とするのが望ましく、『千載佳句』の誤写と考えられる。

金澤文庫本においては、「萬」の用例は三例(319、464、961)あり、その他にも宋刊本と一致する例が多い。たとえば『千載佳句』と『和漢朗詠集』が「纈」に作る箇所を宋刊本と同じく「夾」(215)に、『千載佳句』と『新撰朗詠集』が「著」に作る箇所を宋刊本と同じく「筋」(168)に、『千載佳句』と『管見抄』が「君葦」に作る箇所もまた宋刊本と同じく「高墮」(734)とする(上の例に加えて、198、402、587、644、691、932、1047も宋刊本と同じに作る)。

金澤文庫本については、太田次男氏の詳細な考察がある(金沢文庫と白氏文集<sup>註15</sup>)。金澤文庫本は底本が一種ではなく、平安鈔本(巻八、二十三、三十五、三十八、四十九)と鎌倉時代書写本があり、平安鈔本はすべて別筆であり、鎌倉時代書写本の巻三十一、巻三十三、巻五十四は宋刊本を底本

とし、豊原泰重校訂本は宋刊本をその校訂のために用いたとする。金子番号215、587、644、691、932は巻五十四所載詩からの聯であり、その他の宋刊本と一致する例は、豊原泰重校訂本に含まれているため、これらの用例で、金澤文庫本が宋刊本と一致し、『千載佳句』とは異なることは、『千載佳句』本文を旧鈔本系のこととすることを否定するものではない。

旧鈔本と『千載佳句』がともに、宋刊本以後の白居易文集には含まれていない佚詩を収録する場合がある<sup>註16</sup>。

『管見抄』は、詩題を「聽琵琶勸殷協律酒」(花房番号375)とする佚詩を収め、その詩の連歌『千載佳句』には詩題注「聽琵琶勸殷協律酒詩」(金子番号820、本文に異同なし)として撰録されている。両者の詩題の相違は「詩」の有無のみであり、詩題は同じくするといつてよいだろう。

また、『管見抄』「戲酬皇甫十再勸酒」(花房番号375)と題する佚詩を、『千載佳句』は詩題注を「酬勸酒」(金子番号795)として撰録する。『千載佳句』の詩題注は一般に巻頭等に付される目録のそのように略して作られることから、この題は「戲酬皇甫十再勸酒」を略したものとしてみ問題は無い(但し、この『管見抄』詩句にはや本文の乱れがある)。

金澤文庫本は、詩題を「和楊同州寒食乾坑會後聞楊工部欲到予與工部有敷水之期榮喜雖多勸宴且阻唇示長句因而答之」(花房番号386)とする佚詩を収め、それに対して、『千載佳句』は同詩の詩題注を「和楊同州寒食乾坑會後聞楊工部欲到與工部有敷水之期榮喜雖多□□且阻唇示長句因而

答之詩」(金子重男<sup>715</sup>)とし、「坑」と「杓」の違いがあるが、字形類似の誤写であると考えられるので同題と認定できる。

以上、旧鈔本と『千載佳句』の本文の異同の様相を見てきた。文字の異符の有無および差異による異同はさらに検討が必要であるけれども、『千載佳句』白詩と旧鈔本文はよく一致し、したがって、『千載佳句』白詩本文は旧鈔本系本文を留めるといってよいであろう。

### 三、『千載佳句』と平安朝朗詠集の本文

次に、『千載佳句』と平安朝朗詠集の本文について、その異同を考察する。

『千載佳句』の本文が宋刊本と異に作り、平安朝朗詠集の本文と同文である詩句は、『和漢朗詠集』二七例、『新撰朗詠集』一三例があり、それに対して、『千載佳句』と平安朝朗詠集が異なる本文に作る例は、異体字も含めると、『和漢朗詠集』四五例、『新撰朗詠集』一八例ある。

ある集に含まれていた本文が別の集にも撰録された場合、本文の異同はそれぞれ独自に進み、一般には新たに選録された集の異同が大きくなる<sup>註17</sup>。しかし、『新撰朗詠集』白詩の本文と『千載佳句』の本文の異同について(以下に、一覧を提示する)は、『管見抄』の場合と同様に、孤例を誤写とし、意符の異同をとりあえずは広義の「異体字」というよ

うに看做せば、誤写および「意符の差異」の範囲内の異同である。『新撰朗詠集』白詩の本文も旧鈔本系のそれであるという見通しは立ててよいと思われる。

金子重男『千載佳句本文』↓異同本文「異同諸本リスト」で示す。異体字であつても複数の意味を持つ字を含む。

新撰朗詠集：113 那↓争(新・金・宋馬那注・唐 ※字有り、134 歇憩(新)、168 迴

↓帰(新・回(注・萬・廻(九乙国・宋馬那・唐 ※字有り、216 中火↓火中(新

フネツ) ※管有り、216 旋↓於(新・管・宋馬那注・唐 ※管有り、398 權歡(新

オク・宋馬那注・唐・歌(唐、453 閣↓閣(新・管・馬注・唐 ※管有り、505 倚↓傍

(新・宋馬那注・唐・旁(管 ※管有り、513 宜演(新・須(宋馬那注・唐、

513 才↓材(新)、513 不才↓木材(新)、527 歌↓哥(新 ※字有り、527 漂↓縹(新・

宋馬那注・唐 ※字有り、527 依侏↓侏依(新フオク)・依締(新)・依稀(宋馬那

注・唐 ※字有り、532 廻↓迴(新・金・宋那・回(馬注・唐 ※字有り、603 歌

↓哥(新)、603 族々↓旋旋(新・宋馬那注・英唐、608 條↓枝(新)、613 銷↓消

(新)、870 著着(新) (一八例)

『和漢朗詠集』と『千載佳句』の本文にはやや多く異同が見られ、平安朝の朗詠集本文もその例に漏れず、多くの改変本文を含んでいるように見える。以下は、『和漢朗詠集』と『千載佳句』の本文に異同のある例である。

『千載佳句』の孤例

金子尊「千載佳句本文」↓「異同本文」(異同諸本リスト)で示す。異体字であっても複数の意味を持つ場合は、列挙する。

14 梅↓樓 (和・宋馬那注・唐) ※草書体類似による誤写。

36 砂↓沙 (和・神教・宋馬那注・唐樂) ※異体字。

112 華花 (和・管・宋馬那注・唐) ※日本語が同音同義

意符の差異 (同義語もしくは類義語か)

79 暖送↓緩送 (和也)・媛送 (那注・英也唐)・送媛 (馬)

130 枯↓枯 (和)・古 (管・宋馬那注・唐) ※管有り

139 銷↓消 (和・馬注・唐)

162 秋悲↓秋悲 (和也)・悲秋 (采那・悲愁 (馬注・萬唐) ※金有り)

217 彫↓凋 (和・宋馬那注・唐) ※要有り、要も「凋」に作るか。

293 徊↓徊 (九乙国・和・萬) ※異体字、

568 逕↓徑 (和・宋馬那注・唐)

1015 耀↓曜 (和也) ※和漢朗詠集一部写本の異同意

符の相違

『和漢朗詠集』の孤例

14 看↓望 (和)

36 香↓芳 (和)

36 鋪↓敷 (和)

42 歌↓哥 (和)

46 曬↓曝 (和也)

120 燈殘↓殘燈 (和也)

144 衰↓悴 (和也)

147 喜↓崑 (和也)

147 不知秋送↓不老知送 (和也)

149 躑躅↓ (和也)

149 白芙蓉↓白芙蓉 (和也)

164 森↓眇 (和也)

202 急↓苦 (和)・急 (宋馬那注・英唐)

367 哥↓歌 (和也)

423 伴↓友 (和)

441 笑↓咲 (和)

483 日↓化 (和)

541 意↓事 (和)

568 同↓當 (和)

798 遲↓微 (和)

824 歸↓之 (和)

853 句↓拘

856 還↓帰 (和)

※和漢朗詠集一部写本の異同 類義語

※和漢朗詠集一部写本の異同、文字の反転

※和漢朗詠集一部写本の異同

※和漢朗詠集一部写本の異同 類義語

※和漢朗詠集一部写本の異同

※和漢朗詠集一部写本の異同

※和漢朗詠集一部写本の異同

※和漢朗詠集一部写本の異同

※和漢朗詠集一部写本の異同

872 青↓清(和)・晴(英)

946 巫↓巫(和)

962 花↓華(和)

991 撥↓卷(和粘)

※和漢朗詠集一部写本の異同

『和漢朗詠集』と宋本の一致

141 衿↓襟(和)・宋馬那注・唐 ※金有り・異体字

290 界↓里(和粘)・管・宋馬那注・唐・眼(和) ※管有り・千の誤写

411 移↓趨(和粘)・宋馬那注・英唐 ※管有り・異体字

526 船↓舫(和粘)・宋馬那注・唐 ※和ナシ

657 髪↓鬢(和粘)・管・宋馬那注・唐 ※管有り

928 日↓處(和)・宋馬那注・唐

この異同のうち、『③』和漢朗詠集』の弧例』については、林羅山が『梅村載筆』に妄意に改めると指摘し、最近では三木雅博氏が朗詠ゆえの改変であると論じているところである(註18)。三木氏は、たとえば14番首の「看↓望」は『千載佳句』を含む諸本が「氷消見水多於地 雪霽看山 盡入梅」と作るが、これを訓読すると「みれば」「みれば」と繰り返されるため、『和漢朗詠集』では後者を「望」としたという。粘葉本と片手本で異文に作る場合は改変もしくは誤写であると考えられるが、そのような箇所も少なくない。

最初に目につく異同は、同意の漢字に作る場合で(註19)、42番首の「歌

↓哥」、41番首の「笑↓咲」は異体字、36番首「香↓芳」「鋪↓敷」、423番首「伴↓友」、824番首「歸↓之」、856番首「還↓帰」、962番首「花↓華」は類義語である。したがって、朗読されるときには、同音となるため、『和漢朗詠集』本文は当時の誦された詩句を書き留めたものという三木氏仮説は有力なものであると考える。『和漢朗詠集』においては文字よりも音と意味が重視されていることには注意を払わなくてはならないだろう。872番首「青↓清(和)・晴(英)」は「青」「清」は『千載佳句』や刊本別集の「青天」に対して、音読みで同音となり、これもまた朗読される音が文字よりも優先された例になる。

訓読で説明できない483番首「日↓化」について、三木氏は朗詠詩句の配置が関与したとするが、その他の箇所で見出すことができないので、判断は留保せざるを得ない。

訓読で説明できない異同のうち、946番首「巫↓巫」は草書体が類似しており、541番首「意↓事」もまた、草書体においてやや類似が見られ、意図的な改変というよりも、書写に際して誤写が生じた可能性が高い。

568番首「同↓當」、798番首「遲↓微」の『和漢朗詠集』本文は、千載佳句・和漢朗詠集の本文ともに詩句の意味を採ることができ、誤写というよりは、意図された改変というべきであろうが、その改変の意図を探るためには、白詩以外の改変の様相を探る必要があるだろう。

異同の中で、注目すべきは、『④』和漢朗詠集』と宋本の一致』である。『和漢朗詠集』は『千載佳句』や旧鈔本本文とは異にしながら、宋本と同じに作る本文があり(六例、うち一例(290)は『千載佳句』等の誤写、

二例(141、411)は異体字、二例(526、657)は意味の類似する字(船と舫、髪と鬢)であるが、のこる一例(928)は字体も意味も異なる(「目」と「處」)ため、成立時もしくは書写の段階で宋本の本文が混入したか問題になる。『和漢朗詠集』の成立は寛仁二(1018)年頃であり、一方『白氏文集』北宋刊本の伝来は寛弘七(1010)年もしくは長和二(1013)年(『御堂蘭日記』)であつて、道長圏の遊興の場で、秘蹟とされた宋刊本の本文が部分的に披露されたという仮説も成り立つ。但し、宋本との一致をみるこの一首は『千載佳句』に含まれる『和漢朗詠集』詩句全体に比して極めて希有な例であり、『和漢朗詠集』所載唐詩句が宋本を参照されたというものではないことは注記しておく。

白詩本文の比較だけで全体を論じることはできないにしても、上述の異同の詳細からは、『和漢朗詠集』本文を必ずしも旧鈔本文であると位置づけることはできず、音を重視した本文への改変が見られる場合がある。けれども、刊本系の本文ではないこともたしかである。それを知った上で、唐詩の古筆切れなどの本文の性質を考える際には、旧鈔本系本文を見極める材料の一つにはなるのではないだろうか。

#### 四、草書体の類似から発生する異同

以下では、『千載佳句』と刊本との異同について考察する。旧鈔本においては、多くの漢字を書写する中で、見誤ったり書き間違えたりするこ

とを避けるのは困難であつた。「熱」と「熟」などは楷書体でも文中において似て見えることもあるが、『千載佳句』が参照した底本は、成立年代から考えて、草書体で書かれていたと考えられる。草書体には手偏と木偏など区別のできないものがあり<sup>註20</sup>、また楷書では見誤ることのない文字が草書体では極めて類似する場合もある。よく知られているように、現代では区別されると用いられる「着」と「著」は、草書体では区別が困難であるし、交替可能であつた。『千載佳句』白詩では「着」と「著」は同程度に用いられている。

千載佳句本文→異同本文 を提示後 その異同を含む詩句を  
〈金字尊「異同諸本リスト」〉で提示する。

着者 95 (宋馬注・唐、743 (甲国)、1053 (宋那注・萬  
著者 163 (元)、867 (元甲乙国・馬・唐、870 (新

※121の「着」は、異同なし。

さらに『千載佳句』では「瞼↓臉(43、450、613、747)のように目偏と月偏(にくづき)は区別されず、日偏もまた両者と区別されていないことがある(83「瞶」↓「麗」)。これも草書体の類似のためと考えられる。「目」と「月」は、その草書体が酷似するのではないが、「瞶」もしくは「晚」のように連綿すると、見誤りやすいようである。

草書体類似ゆえに発生したと考えられる異同は誤写であつて、正しい本文を留めない。たとえば、次の例の「盡入梅」(梅に入り尽くす)は唐詩らしくなく、日本での改変のようにみえるが、これは「樓」の草書体を、書写者の目慣れた「梅」であると見誤つたのである(草書体の調査

には『草露貫珠』を用いた(註21)。

14 氷消見水多於地 雪霽看山盡入梅。

白/早春

3330

歴九甲乙国・和・宋馬那注・唐

「早春憶遊思黯園莊因寄長句」

看↓望〔和〕、梅↓樓〔和・宋馬那注・唐〕

一方、唐鈔本から宋刊本に至る過程の中でも、くずし字体の問題は発生したと考えられる。宋刊本はくずし字体を用いていないが、それが底本とした唐鈔本は草書体で書かれていたと考えられる。したがって、宋刊本を制作するまでに、そのくずし字を見誤って本文を改変したことも想定し得るのである。

草書体に由来する異同には以下のようなものがある(中国におけるくずし字体までは見つけられていない可能性がある)。

千載佳句本文 ↓ 異同本文 を提示後 その異同を含む詩句を、  
〔金子尊〕「異同諸本リスト」 で提示する。

曉↓晚

35 〔宋馬那注・唐〕、308 & 309 〔詩題注〕〔卷〕、617 〔元乙国〕、

919 〔馬・唐〕※「曉」と「晚」のいずれであったかは詩句ごとに異なる。宋本が誤る場合もある。その下に「目」「目」がある場合、それも正しく写されることが多い。「曉」と「晚」の草書体の類似は、妹尾昌典氏が指摘している(註22)。

晚↓曉

120 〔詩題注〕〔宋馬那注・唐〕、368 〔宋馬那注・英唐〕

梅↓樓

14 〔和・宋馬那注・唐〕※「樓」がよい。

印↓帛

71 〔管金・宋馬那注・唐〕※乙国は「印」に作る。「帛」がよい。

霄↓霄

71 〔宋馬那注・唐〕※要有り「霄」、250 〔宋馬那注・唐〕

熱熱

136 〔馬〕、239 〔宋〕、508 〔元甲乙国〕〔蘇〕〔宋那注・英唐〕・藝〔英唐〕

※「熱」がよい。

圓團

142 〔宋馬那注・唐〕

蕊葉

149 〔宋馬那注・唐〕※底本は異体字「蕊」を用い、「葉」に似る。

旋於

216 〔新〕管・宋馬那注・唐〕※「於」がよい。

獨猶

244 〔長〕宋馬那注・萬唐〕

潮湖

322 〔宋馬那注・唐〕

練線

323 〔宋馬那注・唐〕※「線」がよい。

半平

325 〔宋馬那注・唐〕※「平」がよいか。

早阜

346 〔宋馬那注・唐〕※「阜」がよい。

稠稠

440 〔宋馬那注・唐〕※「稠」がよい。

點點

508 〔金〕宋馬那注・英唐〕、715 〔金〕※宋本等未収録

鉤釣

510 〔管金〕宋馬那注・唐〕※「鉤」がより望ましいか。

延迎

566 〔宋馬那注・唐〕※要は「迎」。「延」は「迎」がよい。

江頭

587 〔金〕宋馬那注・唐〕※「頭」がよい。

耐耐

720 〔管〕宋馬那注・唐〕※「耐」がよい。

開關

725 〔宋馬那注・唐〕※「關」がよい。

開關

790 〔宋馬那注・唐〕、822 〔宋馬那注・唐〕※「關」がよい。

令合

816 〔管〕宋馬那注・唐〕※「合」がよい。

素索

816 〔管〕宋馬那注・唐〕※「索」がよい。

盡畫

866 〔宋馬那注・萬唐〕※「畫」がよい。

硯峴

934 〔元甲乙国〕宋馬那注・萬唐〕※「峴」がよい。

向歸

994 〔管〕宋馬那注・唐〕

(以下は「千載佳句」諸本間の異同である。)

斑↓班

41 〔乙国〕※同系の語。白詩新樂府の刊本にも同様の異同が見ら

れる。

孤↓孤 42 [甲乙国、809] [乙国] ※「狐」が正しい。

孤↓孤 220 [元乙]、303 [元]、382 [元]、595 [元乙国]、807 [元]、896

[元] ※「狐」が正しい。

雪↓雲 222 [甲乙国]

妄↓忘 714 [甲乙国]

鉞↓鉞 733 [甲乙国]

上述のように、現存『千載佳句』諸本はおおよそ本文を同文に作る。

草書体を見誤ると、詩の意味が不明になることが多いが、それでも『千載佳句』書写者はそれを書き継いでいて、白氏文集の版本により本文を校訂するというような作業は原則的に行われていない(書写に際し、誤って刊本の文字を使用したことはあったと思われる)。したがって、「樓」を「梅」に作る例も含め、底本を故意に改めたのではなく、写し誤ったものと考えらるべきである。なお、言うまでもなく、誤写はその草書体の類似のみによつて生じるのではなく、草書体が類似していなくとも、認識の誤りから生じる可能性がある(後述)。

### 五、文字の反転による異同

旧鈔本の誤写では、文字の反転によるものも多く観測され、朗詠等で親しんでいる訓読のままに書写したためと考えられている(註23)が、こ

のような文字の反転は、中国の刊本の中でもよく目にする誤写であつて、訓読して読まれていた日本でのみ生じやすかつた誤写とは一概に言い切れない。たとえば、『千載佳句』249番首では、『萬首唐人絶句』が諸本「秋中」に作るところを「中秋」と誤写している。

以下は、『千載佳句』白詩本文に見られる文字の反転である。

夜半↓半夜	187	[宋馬那注・萬唐]
中火↓火中	216	[新オウ]
秋中↓中秋	249	[萬]
燈殘↓殘燈	120	[和也]
秋悲↓悲秋	162	[宋那]・悲愁 馬注・萬唐 ※愁悲 [和也]
山舊↓舊山	357	[国]
不同↓向不	672	[長]
戸小↓小戸	823	[宋馬那注・萬唐] ※戸少 [乙国]
也老↓老也	824	[宋馬那注・唐]
得出↓出得	980	[管・宋馬那注・唐]
苦行↓行苦	1054	[管・宋馬那注・唐]

〔金子章「異同諸本リスト」で提示する。〕

『千載佳句』に採られた白居易詩句は詩題注に記されたものも含めると五三五聯に及ぶが、その中で鎌倉写本が字を反転させて書き誤まったのは、六例(1.1%)であり、決して多いとはいえない。

六、同義語・類義語における字の選択

『千載佳句』本文と諸本のその間には形声文字の意符の差異もしくは有無による異同が多く見られ、その異同は、同義語・類義語からの文字の選択の差ゆえに生じたもののように見える。次の例は明らかに同義であるがゆえに置き換えられている。

- 千載佳句本文 ↓ 異同本文 を提示後、その異同を含む詩句を  
〔金子尊〕「異同諸本リスト」で提示する。
- 殿勤 ↓ 殿勤 113 〔宋馬那注・唐〕※新・金は同じ。※異体字。  
〔金子尊〕「異同諸本リスト」で提示する。
- 俳 ↓ 俳 293 〔九乙国・宋馬那注・萬唐〕※異体字。  
〔九乙国・和・萬〕※異体字。
- 佃 ↓ 佃 293 〔九乙国・和・萬〕※異体字。

(A) 形声文字の意符の有無による異同

意符の有無による異同の例には、他に以下のようなものがある。

千載佳句本文 ↓ 異同本文 を提示後、その異同を含む詩句を  
〔金子尊〕「異同諸本リスト」で提示する。

孤例

漁 ↓ 魚 411 〔長〕※旧鈔本の一本に孤例、誤写。

宋刊本との異同

※明清本本文も宋本と同じに作る

- 漸 ↓ 沂<sup>沂</sup> 93 〔金卷・宋馬那注・萬唐〕
- 駭 ↓ 駭 113 〔宋馬那注・唐〕※新・金は同じ。異体字。
- 勤 ↓ 勤 113 〔宋馬那注・唐〕※新・金は同じ。異体字。

枯 ↓ 古 130 〔管・宋馬那注・唐、454 〔宋馬那注・唐〕

掛 ↓ 挂 134 〔宋馬那注・唐〕

底 ↓ 抵 177 〔宋馬那注・萬唐〕

金 ↓ 銀 258 〔宋馬那注・唐〕※〔金（一作銀）〔英〕

映 ↓ 映 283 〔宋馬那注〕

度 ↓ 渡 283 〔宋馬那注・唐〕

以 ↓ 似 351 〔宋馬那注・唐〕※これは誤写か。

才 ↓ 材 509 〔宋那〕、513 〔新〕

眇 ↓ 渺 517 〔宋馬那注・唐〕、527 〔宋馬那注・唐〕

獸 ↓ 厭 560 〔宋馬那注・英唐〕

牙 ↓ 芽 614 〔甲・宋馬那注・英明刊唐〕・茅〔英明鈔〕

籠 ↓ 籠 620 〔宋馬那注・萬唐〕

朱 ↓ 珠 719 〔宋馬那注・唐〕

從 ↓ 縱 742 〔宋馬那注・唐〕

明刊本との異同

※清本本文は多く明本と同じに作る

文 ↓ 紋 1 〔馬那注〕

薰 ↓ 薰 15 〔馬汪・唐〕、603 〔那〕、719 〔馬那注・唐〕

薰 ↓ 醺 603 〔馬汪・唐〕※薰〔那〕

支 ↓ 肢 121 〔馬・唐〕

苞 ↓ 包 125 〔馬汪・唐〕

欄蘭 137 馬汪

秋愁 162 馬汪・萬唐 ※千載佳句は文字反転

虫蠱 202 馬汪・英唐、509 馬汪・唐、569 宋馬那汪・英唐

焦焦 403 馬汪・唐

斗抖 482 馬汪・唐

蕭瀟 485 馬・唐

嵩高 567 馬

常娣 785 馬汪・萬唐

清刊本との異同 ※多くは、清本文も明本と同じに作る

鈿田 294 那汪・唐 ※那は南宋刊本系の本文をもつ。

樽尊 819 注

『千載佳句』江戸中期写本独特の異同

石柘石イ 613 乙国 ※同義語ではない。

道導 798 乙国 ※同義語

宋刊本との異同では、「牙」芽「籠」籠は異体字であるが、「金」銀「や」朱「珠」など字書的に明らかに異なる意味をもつ。しかし、「金」銀「の」例では、『文苑英華』明鈔本が「金（一作銀）」に作り、いずれの本文も流通していた可能性を不示。

宋本と異同のある意符有無の二つの文字は、原則的に何らかの点で同

義性を含み、流通もしくは版本にされる際に、置き換え可能な文字、すなわち、広義の「異体字」と認識された結果として異同が生じたものとなりあえずは仮定しておきたい。なお、旧鈔本は一般に作者もしくはその時代の姿を忠実に写そうとする性質をもつことから、唐鈔本では『千載佳句』と同じ字が使用されていたと考えられる。

明刊本（馬元調本）との異同の多さが目につくが、白詩馬元調本本文の独自性は『千載佳句』本文の範囲に留まるものではなく、意図的な改変と見るのがよいと思われる。文字の意味は時代とともに微妙に変化するので、馬元調が時代の潮流の中でその文字を用いたほうがよいという基準をもって改変したものであろう。明末・胡震亨『唐音統籤』白氏本文は馬元調本との共通点が多い。清・汪立名の『白香山詩集』では馬元調本といった明代の本文を「今文」と呼び、それよりも古い本文を求めて、置き換えもしくは並置することが多いのだが、ここに挙げた例では馬元調本を継承する例が多くあり、このことから、清初・汪立名がこの異同を「異体字」と認識し、かつ、時代により「閑」（唐宋）が「閒」（明清）に置き換えられたように、清初の時代に用いる異体字として馬元調本の本文が適切であると判断したのではないかという仮定を思いつくのである。

異体字の選択に関して、中国の書物においては一般に、ある集の中で同一の意味を表す場合にはその書物全体にわたって同一の字が用いられる傾向があることも重要であらう。『唐音統籤』や『白香山詩集』におい

て、馬元調本の採った異体字とは異なる字を用いている場合には、そのような可能性を考慮しなくてはならない。

ここで述べたことは仮説の域を出るものではなく、さらに言語学的・漢字学的考察が必要なことは言うまでもない。しかし、『千載佳句』と刊本との異同の多くに、意符の有無が含まれているとき、それは単なる誤写ではなく、また、音通による置換というのでもなく、何らかの意味をもつものと見做したほうがよいのではないだろうか。

### (B) 意符の相違による異同、特に用字の時代推移について

意符を異にするとその字の意味も変わるという印象があるけれども、意符に差異がある同義語・類義語の例も少なくない。意符の相違では音が同一の場合があり、中国の書物は音通により文字の置換はよく起る現象である。大きく字形を変える音通の場合であっても、意味は置換前の字義のまま保たれる。また、残念なことには、意符に相違があっても草書体の連綿のために区別が難しい場合もある。そのためか、『千載佳句』白詩には意符を異にする文字の異同が多い。

意符を異にしても同義性を含む文字の組の中には、時代推移の中で好まれて使われる文字が変化するものがあり、よく知られている例として「練」と「鍊」がある。「百練抄」とされていたものが、後世に「百鍊抄」と記されるようになった<sup>註24</sup>。次の二例が時代推移による用字変化かどうかを『千載佳句』のみで判断することはできないが、「暖」と「煖」の例では明代の馬元調本による改変が多いことが見て取れる。

千載佳本文 ↓ 異同本文 を提示後 その異同を含む詩句を  
〔金字書〕「異同諸本リスト」で提示する。

#### (1) 「暖」と「煖」

暖 ↓ 煖 : 7 [馬那汪、25 (唐、36 (唐、79 (那汪・英鴨唐、213 (唐、  
434 (馬、452 (馬汪・唐、719 (汪・唐、802 (甲乙国・唐、841  
(唐、849 (馬・唐

煖 ↓ 暖 : 296 (国・宋那汪、799 (馬汪・英、801 (馬汪)

交替なし : 15 「暖薰」、83 「非暖」、566 「冬天暖」、931 「煖寒盃」※『御

定唐詩』は「暖」に作る。

#### (2) 「銷」と「消」

銷 ↓ 消 : 139 (和・馬汪・唐、463 (宋馬那汪・唐 ※長有り、472 (宋馬那

汪・唐、613 (新、788 (銷愁物) (唐、788 (秋銷) (宋馬那

汪・唐、791 (馬・唐、793 (汪、797 (宋馬那汪・唐

消 ↓ 銷 : 13 (宋・萬、221 (靈餐金・宋馬那汪・唐

「銷」交替なし : 7 「暖銷」※『御定唐詩』は「消」、112 「銷水旦」、229 「銷

永夜」、465 「漸銷」※『御定唐詩』は「消」、502 「銷盡」

「消」交替なし : 8 「消息」、14 「永消」、304 「消殺」、543 「消除」

※ 221 は『千載佳句』の誤写。

時代推移による用字変化が明らかに認められる例として、よく知られているのは会意文字の「閑」と「閒」および「聞」と「聞」である。『千載佳句』白詩詩句を含む諸本では「盃」と「杯」、「暗」と「闇」にも時代推移が見られる。

千載佳句本文 ↓ 異同本文 を提示後、その異同を含む詩句を

〔金子尊「異同諸本リスト」〕で提示する。

(1) 「閑」と「閒」 ※詩題と詩題注の差異は含まない。

- 閑 ↓ 閒 : 94 [馬注]、112 [馬注・唐]、163 [馬・萬唐]、199 [馬注・唐]、250 [馬注・唐]、351 [馬注・唐]、412 [馬注・唐]、452 [馬注・唐]、468 [馬注・唐]、471 [馬注・唐]、472 [馬注・唐]、486 [馬注・唐]、492 [馬注・唐]、500 [馬那・唐]、502 [馬那・萬唐]、595 [馬・唐]、705 [馬注・唐]、723 [馬注・唐]、759 [馬注・唐]、791 [馬・唐]、817 [馬注・唐]、818 [馬注・唐]、848 [馬注・萬唐]、855 [馬注・唐]、858 [馬注・唐]、865 [馬注・唐]、870 [馬注・唐]、981 [馬注] ※唐は「閒」、1015 [馬注・唐]
- 閒 ↓ 閑 : ナシ。

※ 720 還 ↓ 閑 [宋那]・閒 [馬注・唐]、

(2) 「閒」 ↓ 「閑」 ※詩題と詩題注の差異は含まない。

- 閒 ↓ 閑 : 118 [宋]、269 [宋馬]、316 [宋馬・唐]、413 [宋馬]、481 [宋馬]、482 [宋]、513 [宋馬]、514 [宋]、522 [宋馬]
- 閒 ↓ 閑 : ナシ。

(3) 「盃」 ↓ 「杯」 ※詩題と詩題注の差異は含まない。

- 盃 ↓ 杯 : 304 [注・唐]、398 [馬注・唐]、436 [注] ※馬なし、440 [注]、537 [馬注・唐]、697 [馬注・唐]、699 [馬注・唐]、706 [宋馬那注・唐]、711 [馬注・唐]、721 [馬注・唐] ※英有り、802 [注]、803 [宋馬那注・唐]、806 [注]、816 [馬注・唐]、928 [馬注・唐]、931 [馬注・唐]、993 [宋馬那注・唐]
- 杯 ↓ 盃 : ナシ。

(4) 「暗」 ↓ 「闇」 ※詩題と詩題注の差異は含まない。

- 暗 ↓ 闇 : 83 [宋馬那注・唐]、143 [宋馬那注・萬唐]、244 [宋馬那注・萬唐]、276 [宋馬那・唐]、285 [馬・唐]、526 [馬・唐]、781 [宋馬那注・萬唐] ※案は「晴」、870 [宋馬那注・唐] ※千載佳句『白詩には「闇」に作る本文がない。※暗 ↓ 闇の交替がないのは、165「暗壘。闇 ↓ 暗 : ナシ。

右の(1) (3) は明代の馬元調本以降に見られる異同である(いくつかの例外がある)。一方、(2) 「閒」を「閑」と記すのは宋代の傾向であり、明代以降は衰えた様子が見られる。(4) 「暗」と「闇」は宋刊本が成立するまでには同義語と看做されるようになっていたようであるが、馬元調本では置換が拡大している。

以上、同義語の選択において、明代に用字を変化させた例がやや多いことを見てきた。その用字変化の背景には、社会で用いられた異体字の変化があったことも伺われる。

(C) 音通による異同

上述したように、漢籍では音通の文字変化は一般的であるが、これまでにあげた意符の有無や相違によって同音になる場合を除くと、『千載佳句』白詩では以下のような音通の用例が見られる。

千載佳句本文 ↓ 異同本文 を提示後 その異同を含む詩句を  
「金子養」 「異同諸本リスト」 で提示する。

藤桐 117 宋馬那注・唐 ※ともに『唐韻』徒紅切。

明鳴 307 馬注・唐 ※明『廣韻』武兵切、鳴『唐韻』武兵切。

しかし、「藤桐」の例は、旧鈔本が作る「藤」にすべきことを神田喜一郎氏が説いている<sup>註25</sup>。すなわち、この詩題は「酬元員外三月二十日慈恩寺相憶見寄（那波本。千載佳句は三月廿日）であるが、慈恩寺は當時藤で有名であったろうというのである。この詩句は『白氏長慶集卷廿二』や『和漢朗詠集』にも採られており、古い本文の形は「藤」であったと考えられる。「藤」と「桐」は花のイメージが大いに異なるので、詩の読者に与える印象にも影響を与えたとはいえないが、この本文の改変により大きく失われたのは、慈恩寺に対する歴史的事実である。逆にいえば、後世の改変では、「慈恩寺」は寺、「藤」は花（もしくは淡紫の花）に普遍化されているといってもよいだろう。ある時代のある場所の記憶は「普遍化」されることにより、地域的時代的に拡がった読者圏を獲得したといえるのかもしれない。

後者は、馬元調本に始まる本文改変の例になる。これまでも見てきたように、馬元調本による文字の置換例は快挙のいとまがない。そして、その傾向は『千載佳句』に採られた詩句に限定されたものではない。これが馬元調のみの思想によるものであるのか、それとも明代に共通する傾向であるのかを見極めることは、『千載佳句』の他の詩人作品の校異を考える上で重要になってくるだろう。

## 七、『千載佳句』における特殊な異体字

『千載佳句』には日本にしかのこらない字が用いられ、また中国とは全く異なる意味で用いられる字も含まれている。このことは、旧鈔本や『千載佳句』が唐鈔本を忠実に書写したと矛盾するように思われる。よく知られていることであるが、「句」は日本では古くから「句」と記されていて、一方、中国での「句」は別の意味をもつ。『千載佳句』では「春興」に採られた元稹詩（金子養<sup>32</sup>）に用例があり、鎌倉写本をはじめすべての諸本で「句」と記されている。

32 山茗粉言廣韻・海榴紅綻錦集句 同上（元）早春登龍山靜勝寺<sup>註26</sup>

歷九甲乙国・楊董馬・唐季全 早春登龍山靜勝寺時非休遊司空特許是

行因贈幕中諸公

嬾嫩 楊董馬・唐季全、句↓句 楊董馬・唐季全

また、この詩句には「嬾」が用いられているが、中国漢字の「嬾」としてではなく、「嫩」（わかい、若くてやわらかい）の意味で用いられている。『説文解字』に「嬾」は「懈也怠也一日臥也」とある。『千載佳句』白詩にも「嬾」の用例が一例ある（鎌倉写本は落丁）。

50 霞光曙後殿於火 草色晴來嬾似煙 上同 〔九〕

九甲乙国・和・宋馬那注・唐

「早春憶蘇州寄夢得」

曙↓照 那、草↓水 宋馬那・唐・山注、

嬾↓嫩 宋馬那注・唐、上同↓同上 〔乙国〕

「句」と「句」については草行書体が類似していたため、混乱がはじまったのだろうという推測が成り立つが、「纈」と「嫩」の草行書体および書写体には類似性がなく、見誤りや誤記というのは考えにくい。

このような文字の場合、中国諸本と異同があっても誤写と看做すことはできないし、旧い本文とすることもできない。書写者（あるいは鑿者かもしれない）に誤った知識が刷り込まれていたために、底本の字を忠実に書き写しても、「句」「纈」と書き取るしかなかった。

「纈」にはさらにやっかいな問題がある。『千載佳句』白詩に一例あるこの字は、中国古字書になく、日本にのみこのようにとされている。宋明刊本は、これを「夾」に作る。「纈纈」は絞り染めの一種で、「夾纈」とはまた異なる染めの技法である。奈良時代にすでに行われていたという。そうであるのに、中国にこの字が無いということはどう理解すべきであろうか。

215 黄纈纈林葉有葉 碧琉璃水淨無風白／泛太湖

歴九甲乙国・和・金・宋馬那汪・英唐

纈↓夾（金・宋馬那汪・英唐）

『泛太湖書事考微』

2413

この問題は『千載佳句』本文だけでは論じることができないため、ここでは今後の課題として提示するに留めるが、旧鈔本の性質から考えれば、唐代には「纈」が用いられていたとみるべきではないのだろうか。

版本の時代になって、画数が多いわりに頻度の少ないその文字を、より画数を減らした文字に置き換えたとみるべきではないかという仮説を提

示したい。「纈纈」については、中国から日本に技術が伝わったものの、中国ではその技術が早くに廃れたとも考えられる。

## 八、文化的背景の相違から生じる誤写

『千載佳句』本文には、草書体の類似から生じたと考えられる誤写以外に、誤解に基づくであろう誤写がある。

① 72 番首で「蘇少家」とあるのは対語の「伍員廟（伍子胥の廟）に対して「蘇小家」（蘇小は杭州では有名な妓女とすべきであったが、その妓女について知ることの無かった書写者が役職名と理解して「少」としたものと思われる。

② 290 番首「三千里」は諸本の作る「三千里」の誤写だが、書写者の仏教的な知識が働いたために見間違えたのだと思われる。

草書体の類似を除いて、『千載佳句』誤写の理由を大別すれば、大きくこの二種類になる。すなわち、①知識の持ち合わせがなかった、②より親しんでいる言葉に見誤った、である。366 番首の刊本が「洛城」に作るのを、『千載佳句』が「洛陽」とするのは、書写者に「洛城」の語彙がなかったからとも考えられる。上述した文字の反転もまた、書写者の知識がその誤写を生じさせたという場合もあったらうと考える。

## 九、明・馬元調本による本文の改訂

『千載佳句』白詩の異同のうち、同義語の用字の変化は、馬元調本以降に生じたものも多くあることを見てきた。同義語・類義語ではない一字の異同は他にも多くあり、その中には馬元調本、もしくは、馬元調本と『唐音統籤』とに見られるものが少なくない。その用例数は、三五聯に及ぶ(『千載佳句』白居易詩句は詩題注に書かれた聯を含むと三五聯あるので、その6.5%にあたる)。以下にその用例を列挙する。

金子書『千載佳句本文』異同本文(異同事項リスト)を示す。

〔馬〕 136 熱↓熱※誤写・新有り、144 計↓同※和・管有り、407 慶 祚、508 膏  
↓高※管金有り、786 聲↓身※金有り (五例)

〔馬・唐〕 83 非暖非寒↓木暖不寒※新有り、149 房↓芳※和有り、200 影↓陰※  
新・金有り、259 高↓空&空 高※和有り、285 背壁↓照背 馬・唐※  
和・神管敦有り、317 忘↓望、394 句↓曲※金有り、401 汗↓汚※神有り、  
415 中庭↓庭前※長有り、463 減↓減※長有り、507 日↓到、570 眞↓珍  
※和有り、583 公↓翁、615 香↓郷、620 塵 爽、630 & 672 裏 裡※類  
義語・新有り、640 上↓下、798 似↓是、849 行↓入、991 鐘↓泉※注は  
「泉(一作鐘)」。和・管長有り、1008 動↓勒 馬・唐 ※注は「動(一作  
勒)」、管金有り。 (三例二聯)

※ 616 煌↓燕(宋注・萬・騰 馬・唐・煙 那・口 国)は除く。

〔馬注〕 91 漚↓餐※異体字(餐)が正字、136 憚↓鬧 (二例)

〔馬注・唐〕 110 因↓應、620 駁↓刺、726 管↓竹、760 所↓聽※要有り、307 明  
↓鳴※和有り、481 匹↓正※管有り (六例)

※ 699 侵↓親(馬那・唐)は、那波本が同じに作るため、馬元調本以  
前に生まれた異同であることが明らかである。

## 十、宋刊本における本文

ここまで、『千載佳句』本文と刊本のそれとの異同も誤写もしくは異  
体字の選択によるものが少なくないことをみた上で、鈔本の書写に際  
して書写者の知識により誤写が生じる例を紹介した。また、明・馬元調  
本には意図的な改変が見られることを示した。

ここでは、『千載佳句』と宋刊本の本文に明らかなる異同がある場合、す  
なわち、『千載佳句』本文について、妹尾昌典氏の「唐代の古態を残して  
いる箇所(長所)」(註27)に該当する例をあげる。妹尾氏は金子番号36番  
首を取り上げて、詳細な考察を加えるが、本論では例示に留め、その詩  
句の詳細な検討については、稿を改めたい(17 番首とそれに対する神田喜一郎  
氏の指摘は上述したので繰り返さない)。なお、先行研究が詳細する例は、「唐代  
の古態」を残す本文が文学的にも優れている例であるけれども、テキス  
ト研究の立場からは、妹尾氏の言葉通りに「唐代の古態を残している」  
ことが「長所」と看做されるべきであろう。

【用例1】

36 洲香杜若抽心長 砂暖鸞鷺鋪眠 白／昆明春水滿

0137

歴九甲乙国・和・神教・宋馬那注

『新樂府 昆明春水滿』

香↓芳〔和〕、長↓短〔宋馬那注・唐樂〕、

砂↓沙〔和・神教・宋馬那注・唐樂〕、暖↓煖〔唐〕、鋪↓敷〔和〕

この詩句については、妹尾昌典氏の論があり、旧鈔本や『千載佳句』  
が作る「抽心長」を良しとするが、その理由として、春に杜若が生長し  
ていくのを表現するという語義的な解釈を挙げるとともに、「洲香」「沙  
暖」が「天子の恩澤」を、「杜若」「鸞鷺」は「都の住民」を暗喩し、「抽  
心長」は「天子の恩澤」が行き渡ることとを適切に表現するため、  
という<sup>註28</sup>。

【用例2】

139 青苔地不銷殘雨 綠樹陰前逐晚涼 白／池上逐涼

3264

歴九甲乙国・和・宋馬那注・唐

『池上逐涼』首

※東京国立博物館蔵「白氏文集卷六十六」に有り。

地↓池〔那〕、銷↓消〔和・馬注・唐〕、雨↓暑〔宋馬那注・唐〕

この詩句は「池上逐涼」首「其一」の首聯で、静永健氏が東京国立博物  
館蔵「白氏文集卷六十六」所載詩を検討する中で刊本との異同を指摘し、  
旧鈔本系本文をより優れたものと論じている<sup>註29</sup>。すなわち、旧鈔本系  
本文では「銷殘雨」であったところを、宋刊本本文では「銷殘暑」に置  
換しており、その結果、第一句と第二句とが重複する意味をもつことと

なった。

【用例3】

150 槐花雨潤新秋地 桐葉風涼欲夜天 白／祕省後廳

2529

歴九甲乙国・和・宋馬那注・萬唐

『祕省後廳』

涼↓翻〔宋馬那注・萬唐〕

第二句と第四句「盡日後廳無一事 白頭老監晷晷眠」

この例については、三木雅博氏が『和漢朗詠集』本文を検討する中で、  
指摘しており、『千載佳句』と『和漢朗詠集』が作る「涼」よりも、刊本  
の「翻」のほうが「きれいに対句を構成」するために、原語は「翻」で  
あつたとする<sup>註30</sup>。

しかし、【用例2】や以下にあげる【用例4】などの用例においても、  
宋刊本のほうがより対比的な語の選択をしていて「きれいに対句を構成」  
するといつてよく、すなわち、対句がより対比的であることが、唐代の  
原態であることの証にはならない。

右の例は七言絶句で、『千載佳句』が収録するのはその第一句と二句の  
聯である。『千載佳句』と『和漢朗詠集』本文の「風涼」は詩語としてな  
じみが薄いが、第一句で「新秋地」としながら、第二句で「落葉の早い  
桐葉に風が吹き付けて寒々しく」と表現して、第一句から第二句にかけ  
て詩語を連ねながら季節が速やかに進行していくさまを巧みに詠み、第  
三句と第四句では、その季節の流れとは対照的に、静の状態にある自分  
を描いて、その動と静が第四句の老（人生の冬）と重なるという構成を  
もつ。宋刊本では季節の進行を表現することを犠牲にして、「桐葉風翻」

と対句構造が明瞭であり、かつ、意味のとりやすい表現に改変している。

【用例4】

657 霜蓬老髮鬢イ三分白 露菊新花一半黃白／九月一日ハイ 3382

歴九甲乙国・和・管・宋馬那注・唐 九月八日酬皇甫十見贈

蓬↓ナシ「管」※「種」と「鬢」の間に「○」を書き入れ、右に「蓬舊」、

老↓舊「宋馬那注・唐・ナシ」管※右に「蓬舊」、

鬢↓鬢鬢イ和・管・宋馬那注・唐、

三分白↓三分管※「分」と「露」の間に「○」を書き入れ、右に「白」、

一↓一甲ハイ

右は七言律詩で、『管見抄』にも収録された該当詩の頸聯にあたり、『和漢朗詠集』にも同一句が採られている。宋刊本は第五句の「老」を「舊」に置換しており、第八句の対語は「新」であるので、「老」よりも宋刊本の作る「舊」のほうが対比性は高いといえるだろう。該当句の尾聯は「惆悵東籬不同醉 陶家明日是重陽（惆悵す東籬に同じく酔はざるを 陶家明日是れ重陽）に作り、陶淵明「雜詩十一首」を意識して詠詩された句である（陶淵明は其七に「玄暈早已白」と詠む）。

【用例5】

137 夜深起憑欄下立 滿耳潺潺瀉涼白／香山避暑詩發句云 3286

歴九甲乙国・宋馬那注・萬唐

香山避暑 絶

欄↓蘭「馬注、云↓白」九

六月灑似秋雨 香山樓北暢師房

歴九甲乙国・宋馬那注・萬唐

似秋↓如猛「宋馬那注・萬唐」

右の例は七言絶句で、『千載佳句』では「發句云」として第一句、二句を取り上げているため、詩の全容が示されている（香山避暑 絶 其二）。異同があるのは第一句で、『千載佳句』『似秋雨』に作るころを、宋刊本以降の諸本は「如猛雨」とする。唐詩の用例では「秋雨」が多い。「猛雨」は本詩以降に用例が見られるが、本来、白居易は「秋雨」に作る。

【用例6】

567 雲露高峯暈牖 月和伊水入池臺 白／寄戸部侍郎勸買東鄰宅 3272

歴九甲乙国・宋馬那注・唐「以詩代書寄戸部楊侍郎勸買東鄰宅」

露↓映「宋馬注・唐・映（二作露）那、嵩↑高馬、

牖↓牖「宋馬那注・唐※「牖」「牖」の異体字。

右の七言律詩では、『千載佳句』が採るのは該当詩の頸聯であり、その首聯では、詩題にあるように、隣家の購入を勧めており（勸君買取東鄰宅 與我衡門相並闥、諸本異同なし）、この頸聯ではそのように進める理由の一つが述べられる。

『千載佳句』が「露」に作る箇所を宋刊本では「映」とするが、那波本は「映（一作露）」に作り、『千載佳句』本文の存在を指摘している（「露」は「」では動詞で「露（あられ）つた」）。

白／花下自勸酒

花下自勸酒

※要文抄有、異同なし。

杷時→酌來 宋馬那注・萬唐、湏須 宋馬注・萬唐、

攀處→看即 宋馬那注・萬唐、欲落 宋馬那注・萬唐

右に挙げるのは七言絶句で、『千載佳句』が採るのはその第一句、第二句である(第三句・第四句「異言三十字年少百歲三分已一分 諸本異同なし」。本文にやや大きな異同がある。宋刊本では酒の盃を満たして花の枝を見ればはらはらと花びらの舞い降りて来る様を詠み、旧鈔本(『冒見抄』『要文抄』・『千載佳句』)の本文は、花の咲く枝に力を加えれば、それが盛りの花だとしても散ってしまいそうだとし、句意にやや大きな違いがある。

『千載佳句』白詩から宋刊本への本文の異同のある例のいくつかをみた。白詩「長恨歌」の急鈔本本文「舊枕故衾誰與共」に対して、宋刊本は「翡翠衾寒誰與共」と作るといった大きな改変は、『千載佳句』所載の白居易詩句には見られないと言つてよいかもしれないが、対句構造の語の選択があり、白居易作品研究を行う上では、旧鈔本本文を参照する必要があるような異同があることの一端を示すことができたと思われる。

## 十一、おわりに

拙稿「千載佳句」白詩校異」に基づき、本稿では①『千載佳句』本文が旧鈔本のそれと誤写と異体字の範囲で同文に作り(二、「千載佳句」と旧鈔本の本文、「新撰朗詠集」もまた同じであることを検証して、『和漢朗詠集』の独自の改変の様相を見た(三、「千載佳句」と立安朝朗詠集の本文。その上で、異同のある箇所を検証し、②草書体の類似から誤写が生じる例を紹介し、宋本においても、草書体本文から写す段階があるため、同様に誤写が生じたであろうことを述べ(三、草書体の類似から発生する異同、③意符の有無や相違のある異同が多く見られるという実態とその異同の背景に広義の「異体字」の意識があつたのではないかという仮定の提示(五、同義語・類義語における字の選択、④日本独自の漢字の使用例が『千載佳句』に見られること(六、「千載佳句」における特殊な異体字)、⑤明・馬元調本により別の異体字に置き換えられる例が多く、さらに意図的だと思われる本文の改変が見られること(八、明・馬元調本による本文の改訂)、⑥『千載佳句』の誤写の中には誤解から生じたものがあること(四、文字の反転による異同、および七、文化的背景の相違から生じる誤写)を見た。そして、⑦以上の操作を経て、旧鈔本本文と確定できるような本文のいくつかを例示した。

『千載佳句』所載唐詩句を旧鈔本系本文と同じに扱うには、広義の「異体字」と仮に呼んだ問題の解決が必要であるが、それを旧鈔本系本文と認定したならば、『千載佳句』の千首を超える収録詩は、その数の多さゆ

えに、古い本文から刊本文への異同の要因を探り得る素材の一つになるであろう。

#### 註

- (1) 旧鈔本と宋刊本の本文の間に多くの異同が多くみられることはよく知られているところであるが、白居易詩に関する例では、平岡武夫・今井清校定『白氏文(全三巻) (京都大学人文科学研究所 一九七一年)』がその詳細をまとめている。
- (2) 稿者は『千載佳句』所載の許渾詩を考察し、その本文が旧鈔本系本文であることを説いた『千載佳句』許渾詩校異』、『文学研究論叢集』46 (明治大学大学院 院、二〇一七年二月)。
- (3) 妹尾昌典『千載佳句』の校勘『成城国文学』7 (成城大学大学院文学研究科 一九九一年)。
- (4) 神鷹徳治氏私信。
- (5) 拙稿『全唐詩』の校訂「白氏新楽府を中心に」『白居易研究年報』第15号 (白居易研究会・勉誠出版、二〇一五年三月) 収録 参照。
- (6) 白詩の旧鈔本と刊本の異同についての先行研究は少なくない。(1)の平岡武夫氏と今井清氏の著作がその嚆矢であり、近年では静永健「東京国立博物館蔵古筆残卷「白氏文集卷六十六」の本文について」『日本中国学公報』53、二〇〇三年 などがある。
- (7) この時代区分は、妹尾昌典『千載佳句』の校勘『成城国文学』7 (一九九一年三月) による。

(8) 山本まり子『葦手本『和漢朗詠集』の位置』『中古文学』61、一九九八年五月、「十一世紀書写とされる『和漢朗詠集』諸伝本について―葦手本を中心として―」『書写道史研究』16、二〇〇六年 など。

(9) 金原理「肥前島原 松平文庫『千載佳句』について」『語文研究』17 (九州大学国語国文学会、一九六四年三月)、松平黎明編『松平文庫影印叢書 第18巻(漢詩文集編)』(新典社、一九九七年)の木村晟氏と妹尾昌典氏による解題、後藤昭雄『貴重典籍叢書 国立歴史民俗博物館蔵 文学篇 第21巻(漢詩文)』(臨川書店、二〇〇一年)の千載佳句解説、および、『国立歴史民俗博物館本『千載佳句』について』『日本漢文学研究』1、二〇〇六年三月。

(10) 『千載佳句』書写者が底本文を尊重したことは、次のような例からも窺われる。

① 本文に音注を挿入していること。例「95 殘鷺着雨慵休轉 落絮無風凝(去聲)不飛 白/春盡日感事獨吟」。旧鈔本には音注が含まれていることがあり、編者は底本からその箇所も写し取っており、江戸中期写本までこの音注は保存されている。

② 鎌倉写本は最後に詩の総数を挙げて「詩十八十二首」と記し、その下に小字で「今本云今檢十七十九首ト云云二句可尋之」とあり、江戸写本四本はともにそれを書きとっている。鎌倉写本には二丁の脱落があり(後藤 正確な詩数を知る術が失われているが、江戸写本収録詩数は一〇八三首で、「詩十八十二首」を上回っている)。

③ 鎌倉写本に小字で挿入がある箇所を江戸写本は小字のまま書き写し(後藤、「冬興」三首目をその前の部「初冬」に入れる記号もまた、九州大学本を

除いて、そのまま記している(九州大学本は其の記号の指示にしたがった配列をしようとして間違ったようである)。

- (11) 三木雅博氏「和漢朗詠集」平安古写本の佳句本文の改変をめぐって―朗詠のもたらしたものと(京都大学文学部国語学国文学研究室編『国語国文』55(4)〔臨川書店、一九八六年四月〕、後に、三木雅博『和漢朗詠集とその享受』(勉誠社、一九九五年)収録。
- (12) 「古」と「栝」の異同については、(11)の三木氏論文で論じられている。そこでは、音を重視した日本における本文改変がされている。
- (13) 白詩新楽府の刊本の本文においても、この誤りを犯しているものがある。(4)の拙稿参照。
- (14) 船田想氏は「猿投神社所蔵写本『史記集解』本文の系統について」(神鷹徳治・静永健編『旧鈔本の世界 漢籍受容のタイムカプセル』(勉誠出版、二〇一二年)において、旧鈔本本文において必ずしも「万」が用いられるわけではなく、「萬」の用例も見られるという。
- (15) 太田次男『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究』(勉誠社、一九九七年)収録
- (16) ここに挙げた例は、花房英樹『白氏文集の批判的研究』(中村印刷出版部・兼文章書店、一九六〇年)で指摘されている。
- (17) 太田次男『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究』(勉誠社、一九九七年)。
- (18) 妹尾昌典氏の(3)の論文に、林羅山が『梅村載筆』に『和漢朗詠集』本文を論じて「妄意に改め」と指摘することへの言及がある。三木氏の論文は(11)に同じ。
- (19) (11)の三木氏の論文に触れている。
- (20) 山口謠司『秘府略』紙背に見える『尚書』の本文(神鷹徳治・静永健編『旧鈔本の世界 漢籍受容のタイムカプセル』(勉誠出版、二〇一二年)では、旧鈔本ではしばしば手偏と木偏が区別されないことに触れている。
- (21) 中村義仲・岡谷義端重訂『草露貫珠』国会図書館蔵本(松雲齋柳枝軒蔵版、一七二〇年)、および、早稲田大学図書館蔵本(松雲齋柳枝軒蔵版、一七二二年。古典デジタルベースに画像有り(二〇一六年十一月二六日) : [http://www.wul.waseda.ac.jp/kokenski/html/ch06/ch06\\_03781/index.html](http://www.wul.waseda.ac.jp/kokenski/html/ch06/ch06_03781/index.html))
- (22) (3)の妹尾氏論文に同じ。
- (23) (11)の三木氏論文など。
- (24) 太田晶一郎『百鍊抄』か『百鍊抄』か『日本歴史』29、一九五〇年十月。後に、『太田晶一郎著作集第一冊』(吉川弘文館、一九九一年)に収録。
- (25) 『佚名唐詩集 白氏長慶集卷廿二』(貴車古典籍刊行会、一九五八年)の神田喜一郎氏の解説
- (26) 拙稿『千載佳句』元種詩校異『文学研究論集』45(明治大学大学院、二〇一六年九月)からの引用。
- (27) 妹尾昌典氏の(3)の論文に同じ。
- (28) 妹尾昌典氏の(3)の論文に同じ。
- (29) 静永健「東京国立博物館蔵古筆残卷「白氏文集卷六十六」の本文について」『日本中国学公報』55、二〇〇三年。
- (30) (11)の三木氏論文に同じ。